



三河後風土記

參



三河後風土記正説大全卷之三

目錄

一 大久保家三別基本

附 役所の由来

一 關東小條家成立の経緯

一 今川北條三河札入

附 敗軍

一 信忠君孺者

一 附 大浜田居



一 清康君御家督

附 款 討 代

一 今川氏...
一 今川氏...
一 今川氏...



三河後風土記正説大全卷之三

松徳川家三別小居伯の初は是利義貞の治世承亨土年徳川
乃重亮有親入長河孫重子治重之孫徳河孫上別徳川と出奔
志々三別坂井此小居移りありしより奉親位克親忠と徳川家
を代るぬが軍力も七有教養勝高義沈と慮て是又又代り
と歴教の承亨土年己未今明應九年庚申と取元十六年二年
及より言事以別大久保村小住人守津和泉守忠政亦守松官
初在長河
と云者其代り那河と市の長臣と彼家小住より然小忠政極直
此言事あり有り相する人と市の治孫不直と取し孫言事及び小却
て信人系子徳云甘んて忠政大不憤と起し河原友孫言事あり市
是と忠て信人安中在河を武友源助のあ人と招て云々小忠政

秘して已る言ふも憚りく、与市との物の負大せし、或て之れお及と
 いへば、渠の家は年久、商家の後代も忠臣の父、和泉も忠臣の
 忠臣も免れて、海寇の海法と思ひせし、皆かたの法、おの先ん今
 八可教お阿ら、

 以時と市、密に花さの、中居の、中居の、用きと、折して、招き
 解中、小二百と、おつらひ、是能を、之せん、引合、奸通を、おれ、武内、世計の、男
 少、り、説、忠臣、毒、大力の、中へ、おれ、信、つ、入、り、三、三、百、投、出、て、己、ら、家、子、通、商、の、男
 是、今、を、市、哀、慕、の、心、通、し、信、人、と、お、り、て、忠、臣、を、多、い、し、事、を、う、も、い、ん、と、は、と、こ、二、討、ち

 之、心、征、伐、せん、と、欲、れ、る、渠、も、容易、者、か、お、れ、中、へ、通、し、討、ち、へ、ん、以、謀
 ち、て、謀、せん、と、欲、せ、る、之、深、き、計、と、思、ふ、人、と、有、り、ん、中、中、武、臣、に
 之、振、西、你、忠、臣、の、言、ふ、老、を、れ、い、ま、と、云、て、討、ち、つ、て、其、を、引、出、さ、ん
 只、謀、不、成、へ、ん、討、九、法、へ、高、あ、ん、も、思、急、を、傾、て、渠、と、さ、ま、し、と、て、謀、と
 是、よ、う、忠、臣、と、害、せん、と、計、る、と、し、大、忠、臣、大、割、の、老、を、少、く、し、け、ひ、の
 久、く、お、り、ん、之、を、日、毎、と、送、り、以、て、明、應、二、年、二、月、中、旬、世、中、の、諸

く、愛、執、て、一、日、も、お、り、ん、も、何、れ、も、時、知、り、振、花、今、を、登、と、咲、れ、り、
 久、く、和、泉、と、市、役、之、を、振、高、を、求、り、中、を、和、泉、と、お、り、ん、和、泉、と、
 之、市、役、を、お、り、て、使、と、返、し、別、世、居、と、密、に、招、け、お、り、り、我、脱、お、計、る
 知、り、ん、某、と、言、ふ、席、に、招、り、り、信、に、お、り、ん、害、を、加、へ、お、り、ん、奪、ひ
 之、ん、と、信、と、思、へ、り、信、に、お、り、ん、是、より、思、や、に、之、何、と、思、ふ、
 信、に、我、又、信、と、い、害、と、道、必、必、出、し、再、を、せん、穴、皆、と、く、て、急、と、信、
 久、く、不、事、い、言、ふ、心、せ、ん、信、に、お、り、ん、大、急、て、分、取、君、お、り、ん、と、思、ひ
 信、に、お、り、ん、何、れ、お、計、畧、お、り、ん、知、難、し、逃、れ、我、と、お、り、ん、五、退、路、へ、お、り、
 久、く、お、り、ん、忠、臣、大、お、り、ん、と、振、て、お、り、ん、打、立、て、退、れ、お、り、ん、必、定、に、
 其、時、防、犯、我、お、り、ん、中、へ、お、り、ん、何、れ、お、り、ん、我、從、分、大、久、保、お、り、ん、と、打、連
 て、逃、れ、お、り、ん、退、へ、し、我、又、計、て、お、り、ん、退、り、へ、ん、と、信、に、お、り、ん、女、房、を、お、り、ん、

わ市と打連 伍深の祿請の極不潔の思やう小立出れ忠政との
毎に認めと市方三誠とう既忠政招不随て三誠中少入れ計
畧放ぬと候てあ申九俣を武蔵源助調畧と候し立出て事内し
彦平此後愛おけふも時忠政の彦平極と又後まき市小嘉平
鳥居乱る花のかたはつ子を思ひしううも精怪彦極まぬれ九俣
小守に戯れり花小忘るい風なり小守と防つ子儘何の極小
役あり市不害こと云れ時中三々完中おひく様の成り
之孫小守羽鳥よ為お教や出へんとたご一の為小守言やと返
そそも忠政定て徳おほめて花とまはるそ守君の風流にお教
お此やけしよと心解て又こりりれい申中武蔵の忠政の立入
才なる誠と市小守業のせんといふ

き人の居ゆへきんての企むれ後まきと
忠政の情おひ小忠政あんがらふ事と云ふ

此時忠政居る市とはと信と云てつ子此徳とたけり信かりといふ言に
縁の下より数本の徳と突出れ九ありのよと又と信の神幕
此形を何れと扱ひぬの意より居親の時刻早しと云てやれぬ
者程の此時侍より扱ひてと市席小立出つ彦平甘んせ
らるゝ如と忠政死かりて云へ門他世服喪を自元子居南つ
忠政既小忠心此信を正しては言てお君此り誦人言小守あ
存言と入る如却て信人系とた小某と亡まんとけりあふる存信
有良倉の指と擇て住良士の主と擇ては小是先哲の格を
故小忠政今け如と去て代玉お小人を欲する従今日お別て
再会の仕難し小境の忠政を送る信と云七何と云と市を取
申小川立身席と候とてと云ふ申中武蔵の初として小守汗

撫れと信言をられにおめくも忠政と又送りゆめおるを人質と丸
まらぬぬぬぬ別と立去りて後西之河(其事)とて又い傳り
哲徳を居志(うりり)流流の余り雁を舟の弓矢て物とて(其)が
あし流(立入)る波不と見れ(聖宗)似る湖あり(其)例(其)十
年の松の太木若む(り)らわ(後)此(菊)の(を)うり(村)交(花)の(女)少(て)
其(葉)の(を)さ(る)後(お)き(た)つ(る)風(京)で(者)れ(又)さ(り)ら(れ)忠(政)
哲(徳)の(を)さ(り)ら(れ)御(は)へ(と)え(出)一(壺)と(一)出(と)つ(て)三(壺)を
福(所)ろ(う)と(詠)り(と)眠(り)希(後)の(念)ふ(を)仗(衆)を(信)忠(政)と(例)に
其(て)る(白)太(頼)小(吼)鳴(り)り(り)月(忠)政(あ)い(や)と(秘)る(を)歌(り)四(方)と
見(る)小(眠)小(危)る(と)の(も)な(し)と(詠)く(よ)一(膳)の(二)ホ(と)は(ま)さ(け)る(畜)
生(れ)と(つ)ぶ(や)れ(な)く(も)腫(と)曲(て)又(ま)や(と)眠(と)か(と)る(希)頻(り)小

吼る声小目えす太おめく一睡小令と思ひあむ曲肱とほまらる
曲との思ひ知れと飛をりて板井小下と切あやま(尺)伴の白太の首
水もたまふ(尺)折(後)と(心)と(不)思(儀)や(け)首(云)り(と)飛(て)松(の)海
し(丈)と(そ)又(一)ち(俄)池(波)さ(め)兒(子)指(よ)上(と)の(ら)め(く)多(尺)お(は)
い(ち)と(信)使(り)な(る)信(守)と(是)と(見)る(尺)尺(伴)此(場)の(用)え(一)件
此(丈)の(首)信(守)と(り)忠(政)を(死)に(相)い(け)と(我)眠(小)付(と)む(と)一(壺)を
む(と)何(り)ら(み)又(某)と(秘)言(あ)て(れ)無(た)ら(と)の(女)と(不)知(て)教(る)る
よ(お)以(て)物(又)を(ん)と(指)と(と)ら(り)孫(小)伴(の)蝶(と)切(教)を(見)し(り)して
その(よ)と(子)孫(小)告(志)め(ん)と(家)此(宮)後(と)る(三)河(小)聖(徳)郡(上)和(田)村(長)壽(小)
を(り)居(形)者(者)孫(又)小(聖)徳(一)壺(丈)と(長)壽(郡)て(は)小(尺)多(尺)所(より)社(檀)ま(り)め(り)四(壺)這(小)尺(尺)
叶(お)時(は)仍(な)く(教)不(す)小(尺)多(尺)所(より)社(檀)ま(り)め(り)四(壺)這(小)尺(尺)下(和)田(村)あ(る)と(と)て
与(る)尾(お)犬(の)字(を)用(ひ)り(る)う(い)の(尺)か(う)丈(の)意(を)承(て)大(の)字(小)改(ら)る(と)後

忠政の長親の寛仁と傳つて終ふ子身と引て由家人と社成りたり
忠政の子あり左馬廐平忠佐其一八弟八弟忠利二七也忠世は子
お様も忠隣と之相別十田平の故二八は忠の忠佐四柱あり忠方あり忠志あり忠長
十五の子に忠孫名當時出羽守忠務

六美名忠教見す子孫三別ありて新設四柱八軒あり
世人四十八久保と異名あり 佐徳川長親は由又由存生の内丹
由嫡三弟三弟信忠は由由家督と譲とあり子孫ハ刺殺ありて道園と
ありて西太夫は明應九年八月十日に卒去者大樹寺に葬
あり 松平院殿大胤西忠大居士と追号あり

其の法遠あるに河由押後守護あり今川武敏氏親とて法乃
威と名あり常相格今川家此先祖とを承り是利三年武敏氏北條
時政の婿と成り三河武と名あり吉良西条の城とあり是利三年武敏氏の忠

乃と上徳分長氏と云妻服たり依り吉良の唐とあり二男と泰氏の
時政の介孫友義氏の家督と云信之泰氏の子孫ありて吉氏あり
又上徳分長氏の嫡子と信氏と云是れ吉良と名あり武敏氏の次男
と今川武敏と云是れ今川元祖と
武敏の二男を影形入野と云三男は本田
四男は関口五男は石川各古名と云
その後是利天下と治り時ありて三代目平満将軍今川上徳分を胤と
あり吉良今川の両家と云初て家門の号を得て是と唐苑院と云
大政大臣お仕給ふ時吉良今川と云る事と稱し是れ徳大寺様と
せしむへき有信あり公方徳の吉良方徳吉良徳分あり今川分
二法より徳院文を治りたり也は重信より今川家あり吉良分
は中家より家督ありあり今川氏親つくと思案ありあり是河由に
先祖曰所の可成れ一系も切絶へんと欲す却も徳川家も切絶へん

左社安かきと懐り思われれはと帝使家の子を招て宮に召し我
 之御玉と一糸小切磨らん欲正と下小使川家か数年の月把振ら
 と之夫何程の事と等閑小思ひし下付はるを以て氏親の幕下の
 老若追使川の者小語らむの事ありあまにしつる荒必赤と用
 甲と云ふ者連不徳代せんと思ふと有るれ。老若何れ初に接
 て也使使川家の事分記小教といふ事代の方使を後小氏と
 恵こま上武常尤指して今商家想小共と申て一我小切を以て
 之河清南家と傳り使川家一心と寄人の必定之討人の將之撰記
 卒年勿記也事畧者傳りしと申と申れ。氏親を納給有万末
 不當の號物智勇兼備のそ人小謂小者(子とて相、評及小及し
 相別也田原の概小存下、小使新九郎長氏入后早雲小上御云人有

西より此と終小早雲と下を以出されり 作は新九郎長氏入后より由
 来と尋ゆ小人を本代桓武天皇の曾孫高原親王と云ふ子
 高見王の孫と云ふ一と云と送り終小早雲子上使高見王と云ふ平の性
 と云ふ子法寺府將軍平國香 常陸の大極と云 之子法寺府將軍 貞
 盛と云子上使今経衛と云武義と云ふ子下使今秀衡と云子
 伴雅の京進 盛光 は時伴雅と云ふなり友小や伴雅平氏と云ふなり初て伴雅と名系り 十二代の孫と
 伴雅孫河守照康と号して使中の内を撰成也之子新九郎
 長氏 長氏前 孫小長氏承亨四子子年使中五小生れ 文安四
 年丁卯五月妹淋の合戦小十六歳あり初て軍立し敵の望
 降小一書小馳入つて追討敵と掩立給ふは別敵二人討たて
 する存也 ますり後成しの追合小も七先也小進也武勇を所し智

とるり妙小蔭院の辺より思ひも盗賊の害も多し路法に初め
長勝まきの急奪云れ赤禊の神して白屋性来は其神也
あり出りしれい男盗賊と切死せんと子交百交思ひれれ大仍い
細瑣と不顧彼は大概の敵一人名も勿れ匹夫と死せんや名を
立て功と云ふんわい志くべくもは波可と立去強り心よりけ
たうらう路法の術いきて五ぬ太刀をて奪云れ刺赤禊の
神といれ志を奥れ立も此やよ野とせれ葉山子の十とかとと
腰まよひて肌を傷しぬいとく強河小を門に小立て情を乞て立
越多形強河をとりて叩こみ神細あれとも便へき言の如れ
を社の縁に帯柄の起伏して四言も送るれれ社に込十やのひた
る不武朝起らめくしれ女を初入事長氏を僕佐の社に門に資料を

乞物して赤物の内より僕佐といふ何事やんけやれ僕佐命とて
不害の敬色有かろ別披箱を開て白之垢の小神を云出也氏小
板け并志せて城下富もの家小傳ひ何やん私言小亭言おもく
也氏と叩つく也氏不害の心晴ぬもそ空良夜と更化小夜夜
の別汁小伴の僕佐衣服大小更番をを替へて也氏小板て目今
社に小座して市辺の各座志強ふをえぬい一中中市辺の社父作替書
氏具此古娘と今川氏親の妻と成ぬり信小市辺の寺板と信明書
流石小摺の妻と急らる中と成へんは是と強き氏親(市形)て今
新小小福といぬ出ぬふへき小座志とりと始末と語る氏親の家と
成れと近隣近院と事小文中ぬれ日夜且事今我止時句
時也也氏毎交先登して望きと俾る強きと破り武威と振るる

既小流小納と云々、小流小氏親、大流小氏親、終小流小氏親、初小流小氏親、
長氏時小流小十六歳、明應元年壬子三月、今川氏親、小流小九郎、
この武勇と感、留士ト方の彦と云、八、伊豆、駿河の境、
城、日、小流小時、始、城、日、小流小、
六人の輩、時、中、村、有、竹、
日、二年、癸、丑、九、月、上、旬、の、日、伊、豆、並、山、の、城、を、攻、め、被、城、小、移、す、
時、
伊、豆、並、山、の、城、を、攻、め、被、城、小、移、す、
云、今、者、系、統、義、家、の、三、男、之、政、知、り、既、小、遊、去、者、有、て、嫡、子、不、有、り、家、督、
たり、
故、小、流、男、系、統、九、十、四、歳、也、
關、東、公、方、堀、越、の、市、市、と、云、長、氏、心

此申、小流小、堀、越、殿、と、討、こ、し、豆、利、と、一、幕、小、流、と、云、や、と、思、ひ、
け、堀、越、殿、の、南、時、公、方、此、親、族、之、容易、也、計、難、し、と、思、
從、者、又、六、人、百、連、末、と、云、り、
中、三、七、日、武、時、湯、場、の、亭、主、を、招、酒、吞、せ、令、報、
心、
と、一、覺、
所、小、流、
伊、豆、並、山、の、城、を、攻、め、被、城、小、移、す、
今、九、郎、小、流、小、氏、と、云、
和、心、
久、々、在、法、人、
既、小、流、小、氏、親、

しより倭命を吐けしに風乱れたり依て園東又徳主も出れし
海に古川の公言成氏を持氏の慕ひ或は左に上板野定小を力に
する人多し依て西河川に才不裏激せし誠を言ひ能事大に海を流
して彼れに長氏もた不流しに必信居るひさか 家風表を
以神所不陽之くはををわくしをを打りしに其要害を能
又と母し何れを此風情をて並山に泊りたり今川氏親不加糖
とてて先をき、忍びの兵不密計と云合て數十人堀越指し
之後若河大及有下六人の侍大将とて都合を言ふ余人強制
清水浦より兵和不兵不豆別松橋不忌得てまより陸不揚り
黄瀬川と并越つ堀越の山下不あり吾園と作て攻り得
城中不教を入しと思ひもよむ園章もさる大方なりは中不

園戸揚戸を光京ハ各を坊する大別。考こり此澄をて投りつ
き標不をせしり甲人強不十四年長澄川信忠不射射り其
間に武重の考先利し物々しき指場と指園め得る際
戦不及し不不並入重る忍の考先不家信不不死散て出所不
大とをの烟下分園と作て切て此れ、内介の敵不僻易しと云
取れて大徳左徳不流川中不園戸揚戸を光京ハ討死されたり
布使平法計と徒へ一文字に地不あり兼九石を助射人今、叶不
八石不犯其將臣下の虎石と雖も其園東の正家人と百連てを祝多恥
辱と云ふまへに 逆有敵と四角八面不進まに難射、吾園と切指し
三前指敵射長重進兵不勝と石籠兵を不進を不あり兼九石を討止
めを不ありまへに 掃屋不不あり兼九石を討止、吾園と切指し、自今十文字

義経の扱も教の為不切なりとせ修定に預け一息待て扱ふ所不
 流川の軍勢も切りくも地をうすいで京洛の休せよと云ふ事す
 太刀を其向かはしとんと其に敵中へ地へ向ふ者又甲共其向海
 者の押付肩先膝帯も脚南獅子王の怒り切り切られ其の
 勇壮不僻易しと斬て迎付共して却り又其扇玉次太き揚て渠に
 中より別者迎付てハ叶わ御しを矢を以て射殺せしと云ふ事此
 八言より追えまさし二羽射する矢に板石をさす五羽のめをれを
 光景心に極しと云ふ事身金石をたあされ射され矢を
 筆毛のやく交流して力を運さぬ窮て立出くこり切て死せし
 と惜まぬ人しと云ふ事切て是を北原に光景討死と云はれは
 本森山之志して後ひの事心切に云れは臨臨届らるる事不た物

新九郎忠氏自ら大旗を運て是を運る事なれ今ハ是と云は
 志て山中の一池へ腹一文書を捲切て 小動を伏候ふ今年僅小
 十太歳にりると云新九郎忠氏一瞬の間豆別を押付し士之招法を
 寛くせりて年貢を降しとれ初る百姓の安否の思ひを云ふ
 新九郎別傳の傳ふに之は松平三太夫の江和の江兵庫助田子の山
 本喜喜良の田村市助大元への振京大徳庵を介伏候九郎 雲見
 之水谷比企の計今同傳信平を指れ血相監上村云々也七肥亦忠
 富永之也其弟忠氏も属し其の傳ひ信直も忠氏初は計長氏心中
 小南徳竹の傳ふ事一関八別を以せん物とて大元の計略を思ひ立
 是の南の一社云之計大明神に宿願して彼社に集請し宿願の事と
 形相云しそ夜も夜を運りこりらるる夜も宿願しそ 唐舟子

長氏をたりたり侍りて昔の如く大要に二本あり然れども何くともなく
つゝの荒池某侍の故より本を束して根を交す難し長氏も中本
怪しむるに是れを又本を免角にて侍の荒池二本の根を忽ち交す
たりしに二本の根を大地に倒れ荒池に死んで虎を虚空に白く
吼ると見えて道へ交わるとり長氏希有なる思ひあり侍りて
是を考ふると生れ永享四年壬子の年に剽荒化して虎をぬき云
本を平々句白鹿野に關八別れにして根をいあふ根を疑り根
室形を就せりと見えたり本を根て神馬一疋太刀一振隆一匹を
侍りて宝物を納めたり下向ありて長氏荒川中村を去る
招きとりたりハ昔あるに源頼朝の治世に初北條時政尚わら祭登
して源九代天下に根を根に根を長氏北條氏流を治めり

時政の子を娶て姓を北條と改んと是より北條氏茂と稱し婿男
新九郎氏徳と成候と伝とて身は刺髪して早雲宗陽と号しり
又その相州七田系に城に大森信徳の實弟を其族上根を旗
下より早雲計て七田系に城を奪はると思ひり我牙に北條
丹生ありて徳を束め大森を親しむ根を多信を互して心危の事と
評し他も多記神にありて早雲供を大森言へて下中入りて相
馬に隣りて早雲を魂供と自今以後お互に急務を極少も
別心より交する者相言を語り中と云送られんと大徳寺
五郎根に早雲祝を我も威幣を随服して好を強ふ上とて家
何と交すと大徳寺よりりりり後早雲中道言はけは已れり
石橋松山巴も相言多如く南西の枝原大方に箱根山に近ひぬ

惣子の者大に波山(井)入れて柘麻と豆別(退)入比(比)放て柘中
至存(比)中(比)先(比)大(比)生(比)家(比)の(比)大(比)受(比)あ(比)て(比)比(比)中(比)送(比)百(比)実(比)執
若(比)後(比)代(比)思(比)意(比)も(比)勿(比)く(比)兼(比)る(比)幕(比)下(比)同(比)前(比)の(比)早(比)雲(比)の(比)不(比)安(比)化(比)事(比)と
免(比)し(比)け(比)れ(比)ハ(比)明(比)應(比)四(比)年(比)乙(比)卯(比)二(比)月(比)十(比)五(比)日(比)の(比)夜(比)より(比)軍(比)兵(比)を(比)惣(比)子(比)不(比)造(比)了
小(比)田(比)原(比)の(比)山(比)中(比)へ(比)走(比)り(比)兵(比)を(比)と(比)り(比)去(比)依(比)入(比)人(比)未(比)本(比)宿(比)を(比)惣(比)子(比)不(比)造(比)了(比)未(比)明(比)徹
小(比)田(比)原(比)之(比)市(比) 小(比)田(比)原(比)一(比)押(比)寄(比)を(比)関(比)と(比)仰(比)て(比)攻(比)り(比)り(比)ら(比)れ(比)た(比)其(比)時(比)其(比)息
男(比)孫(比)也(比) 実(比)孫(比)也(比) 在(比)隱(比)念(比) 思(比)意(比)ざ(比)れ(比) 妻(比)も(比)中(比) 之(比)惣(比)子(比)不(比)造(比)了(比)
防(比)戦(比)の(比)御(比)と(比)先(比)小(比)石(比)を(比)又(比)比(比)し(比)け(比)り(比)や(比)あ(比)わ(比)と(比)領(比)兵(比)を(比)急(比)不(比)お(比)し(比)て
氏(比)保(比)大(比)子(比)と(比)先(比)比(比)れ(比) 早(比)雲(比)擲(比)り(比)より(比)攻(比)入(比)り(比)り(比)と(比)仰(比)て(比)柘(比)麻(比)市(比)如(比)向
市(比)之(比)進(比)む(比)付(比)死(比)也(比) 市(比)中(比)大(比)森(比) 幸(比)く(比)し(比) 比(比)市(比)も(比)知(比)れ(比)を(比)後(比)比(比)り(比)り
存(比)物(比)孫(比)云(比)大(比)衆(比)甚(比)は(比)湯(比)中(比)云(比)不(比)喜(比)を(比)宝(比)房(比) 思(比)意(比)を(比)守(比)り(比)河(比)包(比)の(比)進(比)不(比)人(比)救
障(比)被(比)意(比)不(比)力(比)不(比)意(比)不(比)起(比)て(比)攻(比)り(比)る(比)原(比)不(比)在(比)法(比)居(比)測(比)命(比)を(比)助(比)り(比)小(比)石(比)の(比)大(比)宣(比)所(比)と(比)云

比(比)時(比)小(比)田(比)原(比)之(比)耐(比)米(比)重(比)一(比)番(比)池(比)来(比)て(比)早(比)雲(比)と(比)相(比)從(比)ひ(比)り(比)小(比)田(比)中(比)の(比)夜(比)に(比)我(比)も
く(比)と(比)不(比)招(比)不(比)身(比)し(比)中(比)月(比)五(比)日(比)と(比)申(比)す(比)相(比)州(比)平(比)均(比)及(比)比(比)れ(比) 原(比)上(比)任(比)豆(比)指(比)撞
与(比)去(比)之(比)切(比)而(比)て(比)別(比)進(比)山(比)より(比)小(比)田(比)原(比)の(比)城(比)へ(比)移(比)り(比)不(比)改(比)之(比) 吾(比)等(比)比(比)れ(比)る(比)而(比)小
今(比)川(比)氏(比)親(比)使(比)を(比)池(比)に(比)以(比)招(比)り(比)れ(比) 城(比)を(比)比(比)新(比)九(比)市(比)氏(比)保(比)と(比)仰(比)す(比) 又(比)比(比)
強(比)別(比)之(比)御(比)り(比) 比(比)時(比)早(比)雲(比)云(比) 四(比)歳(比)あり(比)と(比)云 氏(比)親(比)別(比)早(比)雲(比)を(比)嫁(比)来(比)と(比)物(比)語(比)者(比)て(比)其(比)時(比)是(比)之
制(比)也(比) 凡(比)者(比)由(比)此(比)の(比)介(比)不(比)可(比)有(比) 急(比)彼(比)而(比)池(比)向(比)比(比)佐(比)川(比)家(比)を(比)征(比)伐(比)し(比)我(比)妻(比)倍(比)を
ま(比)を(比)ら(比)れ(比)と(比)有(比)比(比) 早(比)雲(比)之(比)様(比)を(比)比(比)方(比)と(比)仰(比)く(比) 某(比)人(比)比(比)初(比)末(比)乃(比)比(比)成(比)る(比) 之(比)後
小(比)田(比)原(比)家(比)の(比)思(比)願(比) 其(比)何(比)を(比)力(比)と(比)し(比)て(比)忠(比)勤(比)を(比)望(比)み(比)ん(比)也(比) 則(比)ち(比)比(比)方(比)不(比)得(比)比
比(比)れ(比)ハ(比) 氏(比)親(比)大(比)小(比)候(比)一(比)百(比)人(比)數(比)を(比)仰(比)て(比)早(比)雲(比)不(比)極(比)り(比) 早(比)雲(比)只(比)は(比)軍(比)兵
比(比)為(比)と(比)し(比)て(比)文(比)電(比)元(比)年(比)辛(比)酉(比)九(比)月(比)初(比)旬(比)小(比)田(比)原(比)と(比)打(比)立(比)西(比)之(比)河(比)小(比)池(比)向(比)の
去(比)田(比)より(比)惣(比)括(比)し(比)嚮(比)導(比)を(比)招(比)て(比)召(比)置(比)れ(比)り(比) 比(比)是(比)不(比)款(比)房(比)の(比)傷(比)者(比)有(比)之(比)云

先を以て大軍を來す由を傳ふに而して防戦せんと足陣を帝親長
五百人足隊の城足隊はた有に爲れりし事なり早雲が討て打寄の
物に帝親長分死し何程か事々早雲は即ち陣を破りて
端より踏破し徳川家の根柢を枯して足軍を以て討つるは
の城と進み巻捲つれぬおめはさけいて其を早雲親長に討つる
事なれり少くも足軍八百人殺し合戦ありて早雲は早雲一万余人
と二万余人大平川と池原りと云ふる早雲親勝り懸止し押寄りて大樹
寺表に中陣に定まり只一奉り搦破んと計議と早雲は早雲其日
既ち其成りたりし程に早雲は池原に大軍を燒て明を逃しと傳ふ
りし程に早雲は徳川家の城に討つに今足親長は徳川家の城と亡くと大軍を
殺して三別一奉り早雲は早雲を以て搦破りたりし程に早雲は早雲

乞平を向いし一敵に大軍を物ともせぬ明の敵を來す事ありしは速に
討死せんとす夜に城中に徳川家と其小官の死に消息して明を逃し
と傳ふりたり北条氏を討つるも今も早雲は足親長を城とぬき足
親長の事をも思ひぬ一夜あけ八日討つ事あり切も討つるも
城と争ふんとす下を陣に早雲あり早雲は陣を破りて早雲親長を
明の城攻めを必死と死せんとす明の早雲は陣を破りて早雲親長
を以て軍を以て早雲の早雲は陣を破りて早雲親長を以て早雲
徳川家と其早雲は早雲親長を以て早雲親長を以て早雲親長を以て
徳川家と其早雲は早雲親長を以て早雲親長を以て早雲親長を以て
我軍既ち足親長の今も早雲は一家の搦破りし徳川家を以て
とす早雲は早雲親長を以て早雲親長を以て早雲親長を以て早雲親長

志て困致あるを伺ひし長親余亦不徳を命ず不徳を尤致大
將中し北条早雲を以て其の極物向ふに長親の救應おそ
時に長親の廣城殿が兵を補建を命ずるに早雲は兵を
めて長親の後詰し軍に親をも試みと思ふに早雲は向と信あり
りしに酒井見方あり御前中より中程程も角存る所と
中程程も角存る所と中程程も角存る所と中程程も角存る所と
地味より人数一千餘人ありを随へて酒井を先陣に遣ふ
予に直に安祥の城を井之素子角井矢橋川の上川傍より押
舟にて押舟とて夜世に宮の別にお大樹を長出候有早雲を
名を以て長親を以て兼て別にお大樹を長出候有早雲を
さすむに早雲は長親を以て兼て別にお大樹を長出候有早雲を

長蛇の傷を二つに押舟とて一は長親の陣に馳向う
左に長親の初とて力に三つに押舟とて一は長親の陣に馳向う
早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに
と云ふは初とて力に三つに押舟とて一は長親の陣に馳向う
さすむに早雲は長親を以て兼て別にお大樹を長出候有早雲を
一文を以て馳向うに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに
入札を以て馳向うに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに
早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに
二回早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに
早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに早雲は思ふに

孤之并殺す大羽を以てれ。士卒何なるためとて一交み此と突
て入七将八倒秘制とて一喚れをけんと攻殺す荒川を以て西を破
られとて浮足すを軍兵と押辱し火水おめし謀合よりされ
け付おめし湯井の兵荒川の軍勢を率歸とておめし返る
返る荒川を獅子奮迅の勇を振てちくちくと返りぬく返る
お軍此に勝たす西を破りぬきおめし勝たぬに罷殺合しとてお殺す
お殺すいり男(子)をえん(さ)りぬれ二陣此湯井とて親重をえん
勝を打出ると物く(一)聞(一)声(一)せと作りて急新しなく謀合より突入し
お荒川兵庫助正村の一軍助けたり親重の勢と入れ思煙を立て
お殺す長親は西を率歸の足兵と率しお傷をたぬに先之押出
文字お池おし(一)松田おめし討殺重(子)余人を十重(一)お重(一)お返(一)れ巻(一)

已れ討殺んとす(一)多(一)り(一)され(一)三(一)方(一)謀(一)合(一)并(一)合(一)右(一)日(一)此(一)謀(一)汗(一)馬(一)の
池邊(一)小(一)聲(一)お(一)味(一)言(一)の(一)軍(一)勢(一)お(一)悔(一)き(一)叫(一)小(一)き(一)方(一)お(一)い(一)ら(一)ぬ(一)け(一)死(一)の(一)陣(一)争(一)も(一)見(一)
おは(一)五(一)一(一)と(一)又(一)へ(一)り(一)と(一)お(一)松(一)太(一)孫(一)呉(一)と(一)及(一)互(一)不(一)け(一)る(一)西(一)を(一)ぬ(一)れ(一)持(一)負(一)を
更(一)不(一)合(一)し(一)し(一)に(一)け(一)時(一)本(一)多(一)大(一)久(一)保(一)柳(一)平(一)お(一)祥(一)の(一)長(一)親(一)は(一)大(一)樹(一)を(一)表(一)不
出(一)す(一)を(一)ゆ(一)や(一)吾(一)大(一)不(一)移(一)る(一)石(一)物(一)も(一)不(一)え(一)移(一)れ(一)ぬ(一)と(一)川(一)提(一)て(一)禮(一)を(一)授
け(一)る(一)上(一)お(一)し(一)腹(一)帯(一)を(一)お(一)一(一)さ(一)ん(一)お(一)お(一)せ(一)り(一)徒(一)卒(一)お(一)面(一)し(一)も(一)家(一)後(一)お(一)ぬ(一)
是(一)お(一)り(一)今(一)け(一)し(一)て(一)池(一)舟(一)を(一)お(一)張(一)の(一)中(一)汗(一)馬(一)を(一)お(一)入(一)れ(一)り(一)と(一)
お多(一)大(一)久(一)保(一)柳(一)平(一)お(一)り(一)や(一)あ(一)を(一)を(一)お(一)面(一)し(一)お(一)池(一)を(一)お(一)し(一)何(一)れ(一)の
陣(一)大(一)に(一)お(一)り(一)ぬ(一)池(一)入(一)池(一)お(一)表(一)殺(一)す(一)れ(一)け(一)面(一)を(一)お(一)及(一)向(一)す(一)老(一)甲(一)を(一)表(一)向
より(一)曾(一)根(一)を(一)割(一)け(一)ら(一)ぬ(一)或(一)は(一)胸(一)切(一)又(一)は(一)立(一)割(一)小(一)子(一)脚(一)南(一)を(一)お(一)お(一)ぬ(一)
南(一)を(一)お(一)す(一)手(一)と(一)八(一)面(一)を(一)南(一)切(一)て(一)お(一)柳(一)平(一)を(一)お(一)多(一)大(一)久(一)保(一)三(一)を(一)今(一)お(一)す(一)

別とて及之ける流あり松田荒川軍艦大僻易とて及之る事
違ふ貝澤記と均しく竹の谷津津山沖行へる大徳也又人し
を初とて家とくと池とある者極連綿とて新子孫と及之る
此北系艦大と雖も地是を以て神向小成と行る者一と
果とぬる者標立すも長親系死の切り計り振立とあり
系破り額小と知を加へ流へ一層立る者徳河野河井中多柳系
大久保系活を初とて費る声と聲一切振立返り打破て
系房に従横とて七時八倒要散離合して去る者竹の谷の
此族唯一同小池あり大徳の二取小打とある者一文字小
池あり井の字小破り巴の字小標立此終りありと小系艦の
字と寫れて後陳の早雲の旗元へ品切る者早雲とて云甲加る者

若夫振立小艦此徳河何程の事なり我ら薩軍の軍艦とて
之れ礼とて之れ徳とて之れ額小と知を加へ流へ一層立る者
此北系艦大と雖も地是を以て神向小成と行る者一と
果とぬる者標立すも長親系死の切り計り振立とあり
系破り額小と知を加へ流へ一層立る者徳河野河井中多柳系
大久保系活を初とて費る声と聲一切振立返り打破て
系房に従横とて七時八倒要散離合して去る者竹の谷の
此族唯一同小池あり大徳の二取小打とある者一文字小
池あり井の字小破り巴の字小標立此終りありと小系艦の
字と寫れて後陳の早雲の旗元へ品切る者早雲とて云甲加る者

西條家の
子孫と云

互てあまのり中陳心とて過る一文字小切て是をこは以る何

そとつらつと路くもを振連く切てをる元より沖の北条勢立
はも衣動して上を下へと返す西の長親口と初とて徒軍少と表
互の早雲の下知傳ふは太健友徳散乱して四角八面不迹散甲
早雲心いやくけふをぬれ大降不五十して甲山を月退け自不五早云ら
兵討死する者一子三百五十二人といふ形て徳川家討元首矢矯川の
西の堀を掉後河原首せしむ翌朝長親はあはれ井の中陳へて
此の軍首と當せしむる後信長は柳井の夢の後の旗に去り
文明十一年七月十日敵は祖文信光は沖の井に居る是より家紋
を奪う史より味方沖の足方毎先陣して名を振る隣邑急
沖の武官と稱を今沖の夢の夜を不中して武官を我
と孫にあわかしせんと思ふこと信らぬなり此の浄修親重西

目之旗一畏之旗を五家せ居るけ時千形の似るおとく傍に生
出たりし旗物とあり家紋とせしむる後りり

三河後風土記正説大全卷三終

三河後風土記正説大全卷之四

三河後風土記正説大全卷之四

左利兵衛氏茂入道早雲甲少少陣五兵衛軍。士之集め
 之別子在信せり今川家此衆の兵を招得し今一戦五信
 先鋒の死辱を受んし討しれ小東之河の面を急今川家
 の衆を衆於て信川家に随ひ却て早雲と攻へ手中を守入者
 されば小東入道大に殺されば吉田の城に入つ、信不後河（川
 返は是よりして長親の武威中に居りしるに
信忠に頼む者
一、家督信俊 此時
 信川家此也家督二中三信忠にを讓るに更後の二男存系也
一神台東畑不居任あり様井の口をいふ男内信位定不後り吉柳
 東條由御四男甚右昂義春益井の口いふ男利長小子へその男い
 用居まりしるに長命しりてる源廣忠に此也代天文十三年甲辰

八月廿一日小池去あり、棹舟院殿一閑道因大居士と申り、御多
左近藤人信忠は、伊又長親に、此徳と、更藤子の後、水次跡、以、ゆ、不
驕と、その色と、重人、あ、ひ、り、水、中、一、族、跡、存、の、形、と、是、と、跡、と、果、て
織田今川の、両家、一、飯、徳、と、多、り、凡、の、數、代、の、軍、營、名、を、切、五
筋、子、水、次、代、の、時、を、急、く、締、り、割、毎、祥、の、城、と、安、祥、五、馬、五、長、家、と、今、川
家、の、心、と、通、一、旗、中、の、成、り、の、福、今、の、開、し、是、流、の、一、城、の、こ、ろ、成、り、の
お、小、酒、井、大、久、保、柳、五、長、沼、林、と、初、と、て、肩、を、む、き、あ、て、お、ま、り、び、り、
と、歎、つ、つ、は、信、忠、の、水、次、代、日、と、追、て、滅、少、ま、れ、の、件、の、老、臣、も、後、方、に
居、り、り、る、あ、ら、お、折、控、お、滅、亡、旬、月、の、因、成、へ、し、南、時、道、因、君、の、自
然、と、田、原、の、水、身、と、一、何、る、も、お、折、控、お、只、同、月、お、水、心、と、い、ふ、事、と
申、せ、し、も、必、此、大、事、と、控、今、へ、き、お、非、は、凡、の、け、旨、と、申、上、水、五、長、お、依、と

於、料、曾、小、て、及、と、老、臣、の、面、を、密、お、お、連、及、因、主、此、因、忘、小、主、誠、お、某、の
店、家、と、と、て、物、海、邊、事、同、お、者、の、お、く、あり、者、れ、い、謙、小、橋、中、の
團、其、事、と、皆、へ、き、水、者、款、大、ま、つ、へ、し、時、時、酒、井、浄、聖、波、龍、お、五、多、安、南
と、い、ふ、事、お、そ、ら、若、も、多、く、お、浄、聖、お、不、戸、を、た、と、て、安、南、は、此、凡、と
良、方、て、十、二、四、也、何、水、水、姓、之、出、と、う、浄、聖、声、を、密、お、り、て、君、の、水、次、跡、
つ、向、と、あ、ら、浄、聖、お、西、の、何、お、信、と、り、と、申、上、水、凡、と、云、お、水、水、凡、と、い、ふ、也
水、中、原、の、始、より、若、方、と、初、と、て、召、事、お、人、あ、り、水、水、對、面、の、柳、以
不、可、也、信、忠、お、れ、て、い、ふ、ん、と、お、誠、お、返、お、事、と、
信、忠、は、古、き、者、思、ひ、お、人、と、い、
ふ、旨、と、申、上、水、對、面、不、可、
浄、聖
思、ひ、ら、い、扱、い、信、忠、の、供、仕、と、侍、を、世、中、と、あ、ら、死、お、く、思、ひ、取、り、
お、取、り、あ、ら、水、對、面、と、お、教、お、さ、ら、あ、ら、な、あ、ら、い、方、便、と、い、目、と、い、ふ、事、
らん、お、は、と、思、ひ、た、れ、別、詞、と、お、申、り、て、申、上、ら、い、長、親、お、申、上、ら、い、事、

とあふまなく思ひぬいて由縁道は是れ浄土をそむけ世の中今
りごとく存せらるる朋友も源陽して其れを止むべしとて所(五
載)より世名の中流に云々不悔して麻を中絶せし方とて語せる
詞のちよりも大久保柳原若沼林と初とて一とてよくとて又甲乙
とは何事ぞと割れぬ大耳も不や入浄土由縁字(一)身して障子
かまると引ぬき道関を批ふきてまじりける法匠の至るとして何
ぞとて序とささんと何れ法を河井と四品つときて由縁の語をひ
まの浄土在るべき哲心と語めぬ我より由縁の語を聞きて
以て今由家督信忠は由縁高侯とて家臣といふ其の如く法
先達もあはれ法匠も恨と含み織田今川の款由一心とて其れを城地と
執て幕下とて其れを中悪く款法とて今も後小黒侯の一族に

成りぬき方新なりし一月と不徒内不徒川家親系絶せん疑ひし
夥代の由心苦我学と云々在る法匠は徳川家の亡人るとして深く
感して是を評せしとて天人の心とて或は内信信定小心とて又ハ
右京亮親政と云々とて其れ亦春傑利長板心の評語にして
更不変せぬ是の可忠とて其れ君人脱小浮世と語れぬ
とて大正しく由子孫の滅亡と何ぞ余不又ぬふべき臣等とて忠と共
介して徳川家の後業を計りぬと評せぬとて此れは道関曰く大久保
少ひ家脱ふけし不田居の後位忠客不奸人と評せし門人の守とて
さるる法匠身の人絶てまはさるるを知らざるは法匠とは是れをも
評しざるは脱ふか及ふか少して其れ時犯す法が忠心のとて所
以て善といふと信者も其れを以て後人の名を我れと言ふは

此大幸横井内宿信定は武勇多謀兼備たる大將なりは人々
以て内舎見信忠に代りしに於ては不日して内家再興の事
ありと謂ふ下り酒井見方とて出で信忠は少子信康は脱小十三
歳是を以て内家督たる人小何れ亦不足ありとて内迎せらるる不遠不
へしと中凡の輩は林又中凡の輩は信忠に宿願を成せしめ
款の方ふ心とて是時小五子知弱の信康は内家督有て中凡
後乃可居内宿信定は徳法とて懐けて是を以て徳川の家を起さ
るし故に我は是を以て徳法とて懐けて是を以て徳川の家を起さ
信康はとて信定とて君とせんやと争論及りれは道関は中凡
酒井の輩は内宿信定は徳法とて懐けて是を以て徳川の家を起さ
是等の事と不偏して家督の事を定むるや今ける事と信康は

相小等後信忠は成害とせんも計難し信忠と申る事計り
居る事ありと別右の面とて思やう小海軍の家小あり信忠
を以て安祥の城と稱しし安祥は馬本長家信忠の七男也也信忠
は此の跡を継ぎ今川(心)とて是後(心)は信忠の跡を継ぎ
より是も又石川信康の忠節後乃色と云者有石川兵衛尉親康の
一子也親康は信忠の三男也信忠は信康の忠節と拓中凡の事
我曾父子兄弟徳川家(心)とて是後(心)は信忠の跡を継ぎ
脱小親忠は此の事少く十四歳の春元征して一字と稱して信忠
親康と名ある旧例と改らるるは汝又信忠は内家少く元征して
一字と稱せしは内家少くは海軍も源信忠は内家少く元征して
一字と稱せしは内家少くは海軍も源信忠は内家少く元征して

そめ初と別れをの事と後より宗元様と
川家亡ん事と憂ひの事神代に宗元十の謀を以信忠公押込をり
別れ初と云えと云ふあるは長家云其まきりや思ひ之宗元云云
終らに内通人質とせざるへ長家語して己うあを老臣の子と人質とを
宗元大收長家と謀をかなうそ如と立別る初て信忠と大輔は知弱乃
以より信忠に小供して君もその他を思ひより依て大輔を老臣を相寄れ
小供ひはる大輔も痛いと思ひつゝ流石に家此も為る智雅と既
於心しはるこそ酒井本多を始柳原重宗大入保の法老臣並て其
謀ありたり去程に信忠は以明言酒井本多長一終ひ刺(忠)様とこく
なれり信忠老あれに立た不害せし信奸の人のい言を信忠に動仕し
て要りとのいまに老あにせざる依て信人跡にまきり大言出す終ふ

以て大永二年壬午三月三日桃花の宴小例の信人百集あ酒真御機嫌の
宴に打とらんて信忠と大輔は不也とりり信忠はりり以機嫌す
酒何ぞ今に事考ふと三年に被せしと信者 又信忠念して連
来れといふを 信忠と大輔は
りり今日に事考ふと三年に被せしと信者 又信忠念して連
来れといふを 信忠と大輔は
とて其誠の如体の疑はれは西施楊を妃と云ふ人の所産しめ此を
我朝に於て不通始光明信忠と云ふ是も及ん信忠と云ふ今日に
信者も後川せんを心と云ふは(大)亭子と云ふを教さるゝと云ふ
死物と云ふ中をりりも素より色欲深き信忠は居て居るも奴て信忠
と信忠と云ふ信忠と云ふ忠捕何事酒に初信忠あり家此も
信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ
信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ信忠と云ふ

石中やソレ其の五徳してある百連玉ありしを内せし大輔と獅子王の
若くは女くつと立給ふ 信忠の所を質極て別當に
して後藤とて川内をたす 忠輔傳で中けりけ
作玉柄はぬをなく君は正威勢とい入所りとのありに案字 如云し
後で奪取は 安ことと云はへしと子神の伴のまは井物監忠高は極
曾此若しとて君におとく 臂力中しけり君今も密に大輔の女
房に手物おとせおひ取居えとと稱して忠高も言ふ入しせあり
向い請ひせと心得て新御人をもとめおとりて花久と中りうの信心
御おしとて片方の通は社上第を以給ふ世用せせしと 家又用
言をせしとて石はる女房の上とて云ふ認め立お給ひ用えれ
家物と傳ふ引えり 信忠おしけりおとせ移りたりや 吾や大輔
とてと云ふや川内ひ一文字のひけり時忠輔大を揚て君院におひ

跡不置法士教ふ五忠して正家院小危急の時におもふ依て大輔
是飛おく不忠の志を教し志臣の面とて計を以し 且より大信
井所所一由從居おとりのなりと云りうの信て大を移りおのれ
取おる人の計る大悪人にてお見せんを家物とて言ふをいんと牙を搦
給へと八方を細めて包るよふ層合をいかにみえに言ふ破れお
とる 切禪人の徳をけりうのありとて言ふ言ふり 女お似せし事おれり
刻 免前におもひ大信の所一押込をりておる一せとて送る給ひ
享福四年辛卯七月十日 彼所より 遊言あり 安西院殿卷卷考
道忠大居士と稱しとてハけ信忠はの事し

清原公家傳

去程小石河右近左大輔

大輔が婦子を安原を信重とて小石河佐孝を教正三男と
日向の家成とて家成の子代に大任忠降る子とて言ひ

直臣大徳と云ふ時古石 忠臣も依りて 信忠と大徳一陰居たりしめ

古石古石中の古石と云ふ なる道関と云ふ 作として 永正七年庚午の由証書あり信忠の由書

依りて公卿之由法康君南年十三歳に成りて終ひるに由家督と

あるにこれ二男義人信孝子三男の由に譲りて三男十郎之由康孝

子に足領の由に譲りしに由法康君の由家督と云ふ書に終ひるに其

生實實仁子て英武雄智勇徳に終ひるに由一徳と初小傳に由

依りて信忠の由に譲りしに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

とて此書に譲りて終ひるに由大畧略書に終ひるに由一徳と初小傳に由

二百五攻城さんりる定一三三自大より天小昌安一隅の山に
防戦すま城を悟つ或は駿河の今川尾別は徳田家柄内庭
せハ判りあかす小及一し唯底止る計中と定め火多下子
取中一も是を押るなり大あ城を去る事三程畧さる
一く工史とめくら一りるを後受お同子五月廿八日の時より
風烈を雷共鳴り響し流人山を聞く事ありて白雲偏不
晴るのめく小放りりる大保中を去る程を着して徳康の
の山を去る時既よりありあ城を去るへ今時多は極小今日昌安
山中あ城を攻めし中し点を攻めし中りれ徳康の元人極言
が言ふ別軍勢信信あり者今兵言力人隆もて不厭者も
物もせぬ電不道たよりてそ自申此別をり山中れ城を去と均く

と城門小地を去り池にれ隊兵をあげ何事そと因事へ移る事
討仗切伏難く血を何くひたすり一り此時より多七隊余人討死此
歸時小城に居りりる形て漸く日る別小あり雷雨静まりり
下り山中の底を去り大昌安一遊すてけを形にいとさる小昌安に
大子登り置移り城も何れせは傷小城下移り立止に敵兵下を
とりと上をとりと殆どを逐ひ昌安七勇者をれ城門を三回め捕
り死して侍る小大保右侍先せしして去る事討つ小西て安祥小残り
此りたり小多保井柳原石川昌安と初として追て小地東別
有秋は言ふ所のめく人りる昌安大子登り城卒を下知して
中りる今言一旅を何卒以てあり申へし夜明け人を池に東
三河れ物世侍るを討つて敵徒を仰時小追散さんと強引く

頼朝と云を傳へり大久保右衛門もけりしと云ふ事あり故に卒と云て
 只二河子棟屋と云と攻りし大久保兵守りて居りて既ち夜も
 其のし別不及言以城中央陣屋に火燈出さるは火と聲を
 其初山中の城も聲を聞て兵士を聞の声して揚る煙の下より
 切て兵の城兵思ひをさる何事かと問ふ事ある所方是と
 又て大久保大馬場にて間者既に合点と云て城の中を
 連り去られと云七敵も南側の一番所大久保を去る忠務と云
 言て堀裏に去られい見ふれと云て徳川將領の集りて
 堀に去る昌安やと云ふ思ふ所無防に測りたりは是れ犯すに城
 へは後より入りしりし中をけり後と思ひらるは是等の城を去て
 後しなり息女と云清康は小女と云ふ事ありて息女

至る藤原の隠れ御清康はけりし許容なりて既ち求めあり

西三河州諸士大田清康はけり

酒井善右衛門林がむ石川大久保
 柳原是安祥の七河清代といふ

清康は一代の御代をいふ是清康は清代山中の
 河清代といふは河清代といふ事あり
 堀も清康は思ふ傳ふ山中

是後中より入るる是偏に大久保右衛門の功に依りてと云ふ事智
 謀と感し然るに右衛門は其の功に依りて忠を感し其の
 何事かとも云ふ事ありしと云ふ事右衛門の功に依りてと云ふ事
 せりし事あり大久保右衛門の功に依りて忠を感し其の
 君に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し
 其の功に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し
 其の功に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し其の功に依りて忠を感し

りる不潔廉以七出用くませらぬ汝の忠義我何ぞ空為せんわがわして
知れぬれハ汝めきれ勇士とも堂より中もわしは去るく功
者考を不賞ハ勇士何ぞ功を立ん何をも汝の生むべきは
と年めと作あり忠務をき奇友ありハ中分おまき下る事場外
これ運上と我おわし冷く下りやハ中れハ別しとぞぞろろ
忠務内をこ出て後追居ハ向て信らハ我お知少の務をすり行時
例を頼れを忠實の者ハ常ハ教訓せしと凡我お小生れハ是じ
て令張能堂を心お樹る中おれ只勇士をいそるハ必天下ハ大功
と立个と存云してそ身振ハ法廉なる考しハ今ハ年老智と
くして利欲ハ去るハ家ハ忍の目付ハ志業ハ者れ何せしと
三河後風古記正説大全巻四終

作あり

三河後風古記正説大全巻四終

